

皇女総覧（十四）——崇子内親王（淳和天皇皇女）、新子内親王（仁明天皇皇女）——

皇女研究会

崇子内親王（淳和天皇皇女）

六国史における崇子内親王の記事は『続日本後紀』承和十五年（八四八）五月十五日条のものだけである。

無品崇子内親王薨。淳和太上天皇之皇女也。母橘氏云々。遣兵部大輔從四位下豊江王并五位三人。監護葬事。

母は『国史大系』では他資料（末尾参照）を勘案して「橘氏」の傍らに「船子」と注する。この船子の父は『帝王編年記』『一代要記』『皇胤系図』に拠れば、橘浄野である（注1）。

浄野の名は六国史には『日本後紀』の弘仁三年（八一二）一月七日条に叙位の記録があるばかりであるが、『類聚国史』人部薨卒四位の項にその卒伝が残っている。

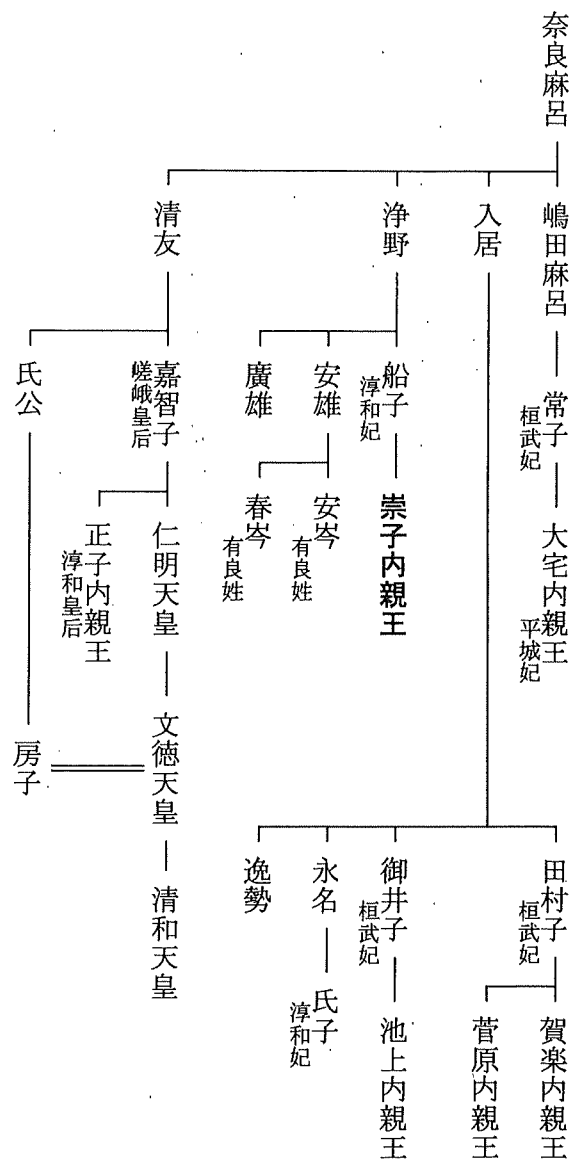
（天長六年―八二九）十二月乙丑（十九日）。散位從四位上橘朝臣浄野卒。弘仁三年授從五位下。十三年正五位下。同年至從四位下。天長三年從四位上。性質

素少所欲。隱居交野。無意出仕。為太皇太后叔父。被授崇班。卒時年八十。

この卒伝に拠れば浄野は嵯峨天皇皇后・嘉智子の叔父に当たる。『尊卑分脈』には記載がないが、橘奈良麻呂の子息であり、嘉智子の父・清友の兄という存在である。天平勝宝九年（七五七）の奈良麻呂の乱以降橘氏は逼迫した状態にあったとはいえ、例えば浄野の兄弟・入居は延暦二年（七八三）に從五位下、延暦十九年（八〇〇）に從四位下に叙位されたことを思うと、浄野の弘仁三年（八一二）の叙位というのは遅い気がしないでもない。

ともあれ六十三歳の浄野への叙位は、弘仁六年（八一五）の嘉智子の立后を視野に入れた恩典的なものである。嘉智子の父・清友は延暦八年（七八九）に、入居も延暦十九年（八〇〇）に卒去しており、嶋田麻呂は没年不明だが孫が平城妃だったほどだからおそらくこの当時は既に他界していたと思われる、叙爵時の浄野は年齢的に橘氏の長老であった。老齢になってからの浄野の叙位は卒伝に「為太皇太后叔父。被授崇班」と記されているように、嘉智子の叔父

であったことが唯一最大の理由であろう。



浄野の女・船子が淳和妃となった経緯も、従姉妹である

嘉智子の影響が無視できないであろう。卒伝に「性質素少所欲」「無意出仕」とされた浄野が船子の入内にどれほど積極的であったかは疑問だが、奈良麻呂の乱の後も家名挽回の望みを賭けて後宮に女たちを入れ続けた橘氏である。嵯峨の次に帝位に就く淳和の後宮に、しかるべき期待を込めて女を入内させるのはごく自然の成り行きであろう。船子以外にも橘氏は淳和後宮に、永名女・氏子を女御として

入れている(注2)。

船子の入内の時期は不明だが、浄野が年に二度の昇叙を得た弘仁十三年(八二二)から、従四位下となった天長三年(八二六)あたりが可能性として高いように思われる。ちょうど弘仁十四年(八二三)の淳和即位前後に当たり、入内の契機としては妥当であろう。

浄野は天長六年(八二九)に卒去したが、それまでにはおそらく崇子内親王も誕生していたと思われる。浄野卒去

後の内親王の後見は母・船子の兄弟がしていたものだろうか。

崇子内親王の薨去後のことになるが『三代実録』貞観五年(八六三)八月十七日条に次のような記事が見える。浄野の孫、崇子内親王の従兄弟に関するものである。

无姓百姓安岑。春岑等二人賜姓有良朝臣。貫附左京。安岑等自疑云。故従四位上橘朝臣清野男安雄之子也。安雄剃髪為沙門。安岑等被編伯父従五位下橘朝臣廣雄戸籍。承和十二年。氏人等称有嫌疑。削籍不齒。今請賜姓定居。為編戸民。許之。

浄野の子息のうち年長の安雄は時期は不明ながら沙門になるなど、内親王の後見として頼りになる存在としては考えにくいように思う。しかし年少の廣雄は甥たちを一時期にせよ自分の戸籍に編入するなど面倒見の良さを見せしており、崇子内親王の後見として最も考えられる存在であろう。廣雄がいつまで存命であったのかは不明だが、崇子の又従兄弟に当たる氏が承和十四年(八四七)、永名が貞観八年(八六六)まで存命であったから、内親王が直ちに困窮するような事態には陥らなかったと想像される。

それにしても一度は自らの戸籍に編入した甥の安岑・春岑を、承和十二年(八四五)に廣雄が見放した理由は何であろうか。時を同じくして承和の変で任を解かれ京外に配

された永名が入京を許され、弟・逸勢の復権に合わせるように昇叙・昇進を重ねる契機となった。安岑・春岑兄弟が戸籍を削られたことと、何らかの関連があったのだろうか。崇子内親王は有力皇女ではなかった。それがために華やかさとは無縁であったが、従姉妹の正子内親王のように政争に巻き込まれて悲嘆に暮れることもなかった。しかし従兄弟である安岑・春岑の悲運なども見聞きしていたのであるから、有力皇女でないにせよ、全く政治的動向と無関係に生涯を送ったとも言いがたい。船子はいままで存命で、崇子に何を語ったであろう。そして内親王は外戚の運命をどんな思いで見つめていただろう。崇子内親王の薨去は承和十五年(八四八)、嘉智子の子・仁明天皇の代である。前述したように崇子の生年が父・淳和の即位前後とすれば、内親王の享年は二十歳代であった。

(注1) 浄野に「浄」の字を当てるのは『日本後紀』『日本紀略』『類聚国史』、「清」の字を当てるのは『三代実録』『帝王編年記』『一代要記』『皇胤系図』である。ここでは卒伝のある『類聚国史』に従った。

(注2) 『一代要記』に拠る。橘氏子の名は六国史には『三代実録』貞観五年(八六三)一月八日条に十余名の女性と共に叙位された記事にのみ見える。大半の女性の身分は不明だがその中で賀茂貞子は後に掌侍となった人物と知れるので、このときの叙位は女官た

ちへのそれだったと思われる。但し『三代実録』の氏子と『一代要記』の永名女・氏子が同一人物か否かは不明。ここでは『一代要記』の記述に従った。

(柳澤 理恵子)

【史料】 冒頭の数字は西暦、()内は筆者による。

崇子内親王〔承和十五薨。母橘船子。〕

〔本朝皇胤招運録〕

崇子内親王、母橘船子正四位上清野女也 〔帝王編年記〕

崇子内親王、母橘船子正四位上清野女、承和十五年五月十五日薨 〔一代要記〕

崇子内親王、母。正四位上橘清野女。船子。〔皇胤系図〕

848 (承和十五年五月十五日) 無品崇子内親王薨。淳和太上天皇之皇女也。母橘氏(傍注に「船子」)云々。遣兵部大輔從四位下豊江王并五位三人。監護葬事。

〔続日本後紀〕

848 (嘉祥元年五月十五日) 无品崇子内親王薨。淳和太上天皇之皇女也。母橘氏(傍注に「船子」)。遣使監護葬事。〔日本紀略〕

新子内親王(仁明天皇皇女)

人はそれぞれの一生を生きた時、自分が歴史の中のどんな位置にいて、いざどんな位置に残るかなどと考えはしない。結果として歴史が残る訳だが、仁明天皇の皇子時康親王は十五才で天皇の位(光孝天皇)につくまで、自分の一生をどう考えていたのだろう。少なくとも、帝位が自分にめぐって来るとは思いの外だったことであろう。

『三代実録』即位前紀に

天皇少而聰明。好讀經史。容止閑雅。謙恭和潤。慈仁寬曠。親愛九族。性多風流。尤長人事。仁壽太皇太后甚親重之。每有遊覽覽讌會之事。太后必請令爲之主矣。

とあるが、風流人として仁寿太皇太后(明子)に重用され、遊びの折りには側にはべり、いつも女性に囲まれていた、そんな皇子であつたかと思われる。帝位の可能性は殆どないにもかかわらず、およそ二十人の妻妾がいたことから(注1)、女性関係のはなやかさが伺える。

仁明天皇皇女、新子内親王(以下新子)は、この同母の光孝天皇即位あたりから叙品などの形で史料に表われ始める。系図を見ると(注2)、まわりの親兄弟、親類縁者の帝や大臣がいずれも歴史の中できら星の如くに輝いているが、その庇護の元にいたであろう新子の一生はいったいどんなものだったのか探ってみた

皇女総覧

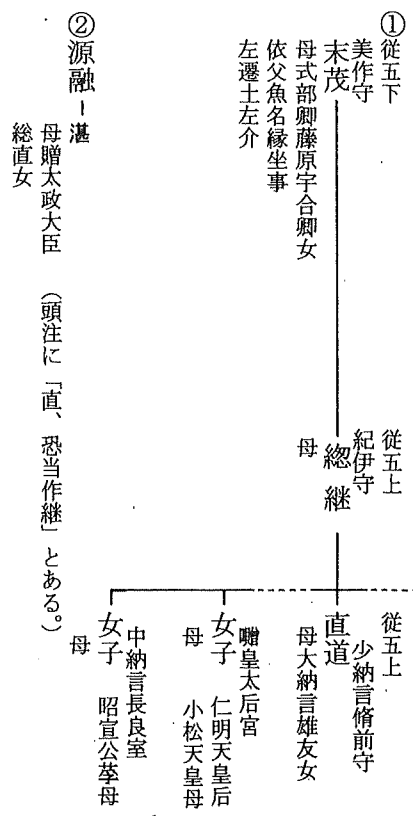
- (一) 桓武皇女総論、朝原・伊都内親王 〔国文目白〕三十三号/平成六年一月
- (二) 高志・高津・甘南備・駿河内親王 〔国文目白〕三十四号/平成七年二月
- (三) 平城皇女総論 〔瞿麦〕第二号/平成七年十月
- (四) 嵯峨皇女総論、業子・宗子内親王 〔瞿麦〕第三号/平成八年四月
- (五) 因幡・安濃・正子内親王 〔瞿麦〕第四号/平成八年十二月
- (六) 有智子内親王 〔国文目白〕三十六号/平成九年二月
- (七) 源全姫 〔瞿麦〕第五号/平成九年二月
- (八) 大宅・賀葉・菅原・池上内親王、源潔姫 〔瞿麦〕第六号/平成九年十月
- (九) 滋野・春日・安勅・大井・紀・善原・布勢内親王 〔瞿麦〕第七号/平成十年四月
- (十) 秀子・俊子・芳子・繁子・基子内親王 〔瞿麦〕第八号/平成十年九月
- (十一) 寛子内親王 〔瞿麦〕第九号/平成十一年六月
- (十二) 仁子・明子内親王 〔瞿麦〕第十号/平成十一年十一月
- (十三) 純子・齋子・同子内親王 〔瞿麦〕第十一号/平成十二年六月

い。
その前に迂遠の感もあるが、奈良時代末からの歴史の流れにふれておく。この時代の天智系、天武系という皇統の流れの複雑さと、その後の氏族間での熾烈な争いの中で、怨みを残す多くの血が流れている。例えば、井上皇后と他戸皇太子の死、氷上川継事件、藤原種継暗殺、伊予親王の変などである。現代の我々からすると、歴史の一部に過ぎないこれらの事件も、平安時代の紫式部には百年、あるいは二百年前の出来事として身近な年長者から耳にすることがあつたであろう。

新子の母澤子は輦車の宣旨を受けたこと、從三位を追贈されていることから、『源氏物語』の桐壺の更衣のモデルとされている人(注3)、『続日本後紀』承和六年(八三九年)六月三十日条に次の記事がある。

女御從四位下藤原朝臣澤子卒。澤子。故紀伊守從五位下總繼之女也。天皇納之。誕三皇子一皇女也。(宗康。時康。人康。新子是也。)寵愛之隆。獨冠後宮。俄病而困篤。載之小車。出自禁中。纔到里第便絶矣。天皇聞之哀悼。遣中使贈從三位也。

澤子の曾祖父魚名は左大臣に昇つたその翌年、氷上川継の事件に連座して免官され、その影響で、祖父末茂は從五位下の美作守、父総繼も從五位下の紀伊守に留まつた(注4)。



總繼の三人の女子のうち、澤子は正良親王（のちの仁明天皇）に、乙春は藤原長良に、名前は分からぬがいま一人の女子は源融の室になり、それぞれに良縁を得ている。『尊卑八分脈』の①②の記事から澤子らと融の室になった女子は異母であると思われる。澤子、乙春はその履歴から直道と同母の可能性が高く、

（元慶八年）三月十三日甲戌。天皇外祖父故従五位上藤原朝臣總繼。外祖母正五位下藤原朝臣数子並贈正一位。

『三代実録』

右記の記事から、澤子の母は藤原雄友の女子、数子ということになる。

この例から見ると、同じ頃、或いは数子もある程度の地位の女官であり、その関係で澤子らの良縁があつたのではないだろうか。父總繼は魚名流の家柄の良さはあるものの様々な血生臭い歴史的事件の余波で受領どまりであり、数子の父雄友も伊予親王、吉子母子の伯父、兄であり、この事件に連座して、大納言の官位を奪われ、伊予国に流される憂き目を見ている。男の政治の世界では主流から外されたこれらの家柄の血筋が皇統の中に入っていく鍵を握ったのが数子、その扉を開いたのが澤子、乙春らの姉妹で、あくまでも想像であるがおそらく揃って美人であつたことであろう。

澤子が正良親王の室に入った時期は分かっていないが、弘仁十四年（八二三年）、正良親王は皇太子になり、天長五年（八二八年）に宗康親王が生まれているので、おそらくその間のことであると言われている。（注6）

続けて時康親王（のちの光孝天皇）を八三一年に、人康親王も八三一年に生み（注7）、承和六年（八三九年）に亡くなるのであるから、新子の誕生は宗康親王以前から人康親王以後の天長年間と承和六年までの十五年位の幅が可能姓として考えられる。新子内親王は寛平九年（八九七年）薨去から逆算するとその享年は五十八才位から七十三才位までであつたかと推察される。

伊勢物語七十八段（注8）に出てくる山科の禪師の親王は仁明天皇の第四皇子の人康親王と言われ、今でも京阪電鉄京津線に「四の宮」という駅があり、ゆかりの地であることが分かる。逢坂の関に近いこともあり、人康親王は俗説で蟬丸の前身であると言われることもあるようだが史実ではない。（注9）

謡曲の成立は中世なので信憑性はないが「蟬丸」の中に逆髪と

（承和六年）六月己卯。授授无位藤原朝臣数子従五位下。

（貞観五年）正月八日。従五位下藤原朝臣数子並正五位下。『続日本後紀』

『三代実録』

官位から三つの記事は同一人物のことと考えられる。承和六年の記事は、澤子薨去の記事の直前に記されているが、その関連は不明である。又、他の多くの女性たちと共に叙位されている貞観五年の記事から、数子は女官であつたかと考えられる。

結婚、出産の早かつた当時のこと、そして既婚で出仕し、高齢になるまでその職に就いていることもあり有るので（注5）、貞観五年（八六三年）、七十才位としても、年令の整合性も無理はない。数子の官職は分からないが、非常に似た例として嵯峨朝から淳和朝にかけての尚侍藤原美都子があげられる。後藤祥子氏（注4）によると左記の通りである。

藤原美都子 弘仁一三年（八二二）叙従三位為尚侍（『一代要記』。天長五年（八二八）九月四日薨。尚侍従三位（『日本後紀』。従五位上阿波守真作女。冬嗣室、長良、良房、良相、順子らの母。文徳外祖母（『尊卑八分脈』他）。嘉承三年（八五〇）七月十七日贈正一位（『三代実録』）。

美都子は嵯峨、淳和時代の尚侍であるが、出仕前に冬嗣に嫁して三男一女をあげている。冬嗣の死は天長三年（八二六）七月廿四日であつて、美都子出仕の後である。

*『一代要記』では美都子の歿年を天慶五年としている。

いう姉官が登場する。

ツレ 誰そやこの藁屋の外面に音するは。このほど折々訪はれつる、博雅の三位にてましますか。

シテ 近づき声をよくよく聞けば（藁屋へ向く）、弟の宮の声なるぞや。なう逆髪こそ参りたれ。蟬丸は内にましますか。

ツレ なに逆髪とは姉官かと、驚き藁屋の戸を開くれば（ツレは立つて戸を開く）、

シテ さもあさましき御有様（シテはツレへ歩み寄る）、

ツレ 互いに手に手を取り交し（シテ・ツレは互いに肩に手を掛け合う）、

シテ 弟の宮か、

ツレ 姉官かと、

地謡 ともに御名を木綿付の（シテ・ツレは着座）、鳥も音を鳴く逢坂の、せきあへぬ御涙、互ひに袖やしをらん（シテ・ツレ、シオリ）。（注10）

逆の見方をすれば、人康親王には姉官がいたという話があるいは伝承されていたかと考えれば、先の新子の一生の幅は十年程せばめられ、六十八才位から七十三才位の享年であつたとも言えるであろうか。しかし、これはあくまでも「或いは伝承されていたかも？」という想像で何も根拠はない。新子が史料に表れるのは

（元慶元年）一月九日辛巳。無品親子内親王四品。

『三代実録』

(元慶八年) 二月廿六日丁巳。四品新子内親王三品。

『三代実録』

(寛平九年) 十一月廿四日乙未。仁明天皇々女三品新子内親王薨。『日本紀略』

紀略、寛平九年十一月廿四日、三品新子内親王薨、按、親子即新子也、西宮記裏書亦誤 『本朝皇胤紹運録』

である。仁明天皇皇女には藤原朝臣貞子所生の親子内親王があり、時に混同があつたようである。親子は仁寿元年(八五一年)に無品で薨じているので、『文徳実録』、元慶元年(八七七年)に四品に叙されたのは新子であることが明らかである。「新」と「親」は音と部首が同じであることから誤つたのであろう。このことから「新子」訓みは「シン」であろうかと考えられる。(注11)

又、四品に叙されたのが陽成天皇(新子のおば乙春は陽成天皇の祖母)即位の時、三品に叙されたのは兄光孝天皇の即位の時、その理由も血縁関係であることは明白である。前者の陽成天皇即位の際(元慶元年)の皇女の叙品は新子と文徳皇女儀子だけであつた。

(元慶元年) 正月九日辛巳。授三品儀子内親王二品。無品親子内親王四品。

(先に記した通り親は新の誤りか)

当時、桓武から清和まで数多くの皇女が存命であつたが、何故この二人が叙位されているのだろうか。繁雑になるので個々に記さないが、儀子は明子所生、他の皇女達の生母は大原氏、紀氏、

西暦	和暦	天皇	月日	記事	史料
八二三	弘仁十四年	淳和	4/18	正良親王(仁明天皇)皇太子	続日本後紀
八二八	天長五年			宗康親王生まれる	続日本後紀
八三一	天長八年			時康親王(光孝天皇)生まれる	三代実録
八三一	天長八年			人康親王生まれる	三代実録
八三三	天長十年	仁明	3/6	仁明天皇即位	続日本後紀
八三九	承和六年		6/30	藤原澤子薨。従三位の贈位 生母藤原教子に従五位下	続日本後紀
八五〇	嘉祥三年	文徳	3/19	仁明天皇落飾入道 宗康親王同時入道	続日本後紀
			3/21	仁明天皇崩御(四十一才)	続日本後紀
			3/21	文徳天皇即位	文徳実録
八五九	貞観元年	清和	5/7	人康親王出家(法名法性)	三代実録
八六三	貞観五年		1/8	従五位下藤原教子に正五位下	三代実録
八六八	貞観十年		6/11	宗康親王薨	三代実録

滋野氏などの出身の女御で、最も近いと思われる清和の皇女の生母も更衣である。身内をひきたてる高子の僻から考えても新子の叙品はあり得べきことであつた。

文末に、周囲のひとたちとの関連を改めて年表にまとめてみる。
仁和三年(八八七年)の光孝天皇崩御で新子は親兄弟を全員失う。その後十年生きるが、後見人は誰であろうか。つながりから見ると、可能性としては、父系ならおの宇多天皇、母系ならいとこの基経などが考えられるが、先の高子との関わりから推察すると、史料はないが、乙春が存命であればなおのこと母系の後見の可能性が高い。偶然とは言え、阿衡事件(注12)にからむ宇多天皇と基経の政治的な力関係の中、中間的な位置に政治的な権力ではなく血筋の—にいた新子は、おそらく双方から氣遣わねばならない方として、敬意をもつてあつかわれたのではないだろうか。自身は意識していなくとも陽成天皇の事件や阿衡の事件がかえつて新子にとって有利に働いたと考えられ、史料が少ないので実像はおぼろではあるが、安泰な一生を送つたであらうことが十分に想像できる。

(惠 比呂美)

西暦	和暦	天皇	月日	記事	史料
八七二	貞観十四年		5/5	人康親王薨	三代実録
八七六	貞観十八年	陽成	11/29	陽成天皇即位	三代実録
八七七	元慶元年		1/9	新子内親王四品	三代実録
八八四	元慶八年	光孝	2/23	光孝天皇即位(五十五才) 潭子、皇太后を贈られる	三代実録
			2/26	新子内親王三品	三代実録
			3/13	従五位上藤原朝臣総繼、正五位下藤原朝臣教子に正一位	三代実録
八八七	仁和三年	宇多	8/26	光孝天皇崩御(五十八才) 宇多天皇即位	三代実録
八九一	寛平三年		1/13	藤原基経薨(五十六才)	日本紀略
八九五	寛平七年		8/25	源融薨去(七十四才)	日本紀略
八九七	寛平九年	醍醐	7/13 11/24	醍醐天皇即位 新子内親王薨	日本紀略

(注1) 『平安要覧・歴代皇妃表』による。

(注2) 次頁系図

(注3) 『河海抄』「仁明天皇女御藤沢子(紀伊守贈左大臣総

繼女）依病退出之時被聽輦車卒逝之後以少納言被贈三位云々」

角田文衛著『日本の後宮』（一九七三年・學燈社）
金田元彦著『源氏物語私記』（一九八九年・風間書房）
日向一雅著『源氏物語の準拠と話型』（一九九九年・至文堂）などに詳しい。

(注4) 『続日本後紀』による。なお、『尊卑分脈』では「從五位下」となっている。

(注5) 後藤祥子著『源氏物語の史的空間『尚侍攷』』(一九八六年・東京大学出版会)

〔注6〕『国史大辞典』「藤原沢子」条

時康親王は『三代実録』即位前紀に「天長八年生」と

記されているが、その月日は不明である。人康親王の生年月日は史料にないが、薨去の年から逆算したのか、『国史大辞典』に「天長八年生まれ」とある。『続日

本後紀』承和十二年二月十六日条「天皇喚時康。人康親王等於清涼殿。令加元服」の記事から二人は双子であつたかと考えられるが、兄が天長八年の年の初めに、弟が同じ年のおわりの頃に生まれた年子の可能性もある。前者の場合、当時、双子の皇子誕生はどのように受けとめられ、扱われたか調べる余地はあるが、本論には直接の関わりはない。後者の方が澤子に対する仁明天皇の寵愛のあかしのようでむしろおもしろい。

小学館『日本古典文学全集』

(注9) 服部幸雄『逆髪の宮』(一九七八年・『文学』岩波書店
(注10) 小学館『日本古典文学全集』

●史料

新子内親王〔母、藤原澤子《藤原総繼女》／同母姉妹、ナシ／同母兄弟、宗康親王・時康親王《光孝天皇》・人康親王／最終位、三品〕

新子内親王（三品。母同宗康）【頭注／紀畧、寛平九年十一月廿四日、三品親子内親王薨、按、親子即新子也、西宮記裏書亦誤】『本朝皇胤紹運録』

皇女 時子内親王 新子内親王【傍注／三品】 柔子内親王 眞子内親王 親子内親王 平子内親王【傍注／无品】 重子内親王 久子内親王【傍注／齋宮】 高子内親王

新子内親王【割注／三品寛平九年十一月二十六日薨】《皇女の項の筆頭に書かれている》

新子内親王【割注／母同宗康】

877 《元慶元年正月》九日辛巳。授三品儀子内親王二品。無品親子内親王四品。十四人。——後略——

『三代実録』

— 31 —